

# ハウスメイド

目次

ハウスメイド  
マスター編

5

新婚旅行

321

ハウスメイド  
マスター編

## 1

あの日、俺は寝ぼけていた。

クラスメイトに告白されたのなんかはどうでもいいことで、それを断ったぐらいなんの良心の呵責かじもなかった。

俺が好きなのはあの女ひとだけだったから……その女ひとが手に入らないなら、女なんて身体だけでいい。真面目な恋愛なんて面倒くさいだけだった。

俺が通うのは、お金持ちのお坊ちゃんが通うので有名な私立白鳳学園はくふう。伯父が業界でも大手の藤沢建設の社長で、俺の父親が副社長。その次男である俺、藤沢政弥ふせまに群がってくる女はいくらでもいた。大人の女から上級生や同級生、喰いたい放題だった。別に気持ちよく抱ければどんな女でもいい。とりあえず、抱き心地のいいセックスに慣れた女が一番楽だった。マジな女は後で困る……処女とつばいのや思い込みが強そうなのは御免だ。

その日も、昼休みに呼び出した好きモノの女と屋上でヤッていた。その後、あんまり日差しが気持ちいいもんだから、つい寝入ってしまったようで……目が覚めかけた俺の前髪に手をかけたのは、そのとき抱いた女だと思っていた。

「なんだよ、まだ足りないのか？」

あれだけヒイヒイ言わせてやったのに、まだ足りないのかと引き寄せた。

軽くキスして、制服の中に手を突っ込んで可愛がってやろうとした。さっきは2度ほど出しただけだから、まだ余裕はあった。

女の首筋にキスを落とす。舌でなぞってやれば、すぐに感じて声をあげはじめるはずだった。寝ていた分、下半身も充電されてるしな。

「いやっ！」

聞き慣れない硬い声が聞こえた後、頬にがりつと音を立てて女の爪がめり込んだ。

「いてっ」

「な、な……なにすんのよっ！」

見上げると、さっきまでいた女じゃなかった。コイツは……クラスメイトの長岡菜悠ながおかまゆ子だ。

さすがに私立のエスカレーター校に、12年も一緒にいれば名前くらい覚える。長岡物産の娘だけど、会社は経営困難で、いつ学校をやめるのかと噂になつてるのを本人は知

らないんじゃないか？

高等部に上がってからも金銭的に苦勞してららしく、他ののほんとしたお嬢様と比べると、随分根性が座ってきたというか、見えてなかなかおもしろい女だった。いつだって自分で作った弁当を、一人体育館裏などで隠れて食べたっていた。

だが、その場所が俺と女の逢引の場所だってわかってなかったんだろな。何度かこっちが姿を隠したり、他の場所を探してたことも。

どっちかっていうと發育不全の幼児体型で色気ゼロ。食指が動く女じゃないから、パスだな。

「ああ、なんだ、長岡か。わるい、寝ぼけてた……」

「寝ぼけるなあー」

起こしかけた身体をドンと突かれて、あわてて身体を支える。再び地面に寝転ぶところだったが、目の前で怒りをあらわにした長岡の様子が目に入る。

フーフーと息巻いて、まるで逆毛立ててる野良猫だ。

「おい、なにすんだよ？ まあ、おまえみたいなガキにその気になつたりしないから安心しろ」

その気にはならないけれども、グロスも口紅もつけてない唇にキスするのは久しぶりだった。胸も、小さいけれども一応あったみたいだしな。

「そ、そんなこと言ってるんじゃないわよー」

「はあ？ それでなんでおまえがここにいるの？」

答えないけど、だいたいわかっていた。コイツの友人が、昼休みに俺に告白してきたからだ。

なんて言うだろうかと待っていたら。

「馬鹿あ！」

いきなりそう叫んで走り去ってしまった。

「すげえ形相。なんなんだよ……」

頬がズキリと痛んだ。だけど、女とヤツた後とはまた違う爽快感が残っていた。

「おもしろいヤツ」

俺はそう口にして屋上を後にした。

翌日、心配した母にでっかい絆創膏を頬に貼られて登校したら、やたらと周りに理由を聞かれて困った。

アレの最中、よくなりすぎた女が背中に傷をつけることがあっても、頬はないからな。まあ、ぶたれたことぐらいはあるけれども、これはない。

「おい、藤沢。一体なにやらかしたんだ？」

友人の沢辺に聞かれたとき、ふと教室の入り口を見ると長岡が、目を見開いてこつちを睨んでいた。

「野良猫に引つ掻かれたんだよ。随分凶暴でね」

俺がそう答えると皆が笑った。

「女にやられるって、おまえらしいな」

俺らしいってなんだかよくわからないけど、アイツの悔しそうな顔を見ると、俺の中のあの女への深い思いが、少しだけ軽くなった気がした。

「野良猫はつつくとおもしろいからなあ」

「おまえ、いい加減にしておけよ?」

それを聞いていた友人の一人、塔野が眉間に皺を寄せる。こいつは中等部時代から同じクラブで一番仲がよかった。

「わかってるって」

やつが端正な顔をしかめてそう言ってきた。こんなおもしろいことは久しぶりだった。

これではばらく学園生活を楽しめると思った。

その間だけ、あの女の面影が薄れていたから……

## 2

「まさか、新しい住み込みメイドが野良猫とはな」

高校を卒業して7年……久しぶりに出逢った野良猫はメイドになっていた。

お袋が亡くなった後、親父が、お袋の大切にしていたこの家を、業者に任せると言い出したときは驚いた。

この家は、ずっとお袋一人で大切に手入れして守ってきた。お袋が入院してからは時々掃除専門の業者が来ていたが、ただ掃除してあるだけで、今までのように家全体が生き生きとしていなかった。そしてそのまま、この家に戻ることなく母は病院のベッドで息を引き取った。享年50歳、病気とは無縁の元気な人だったから、悪性の癌細胞が見つかった頃には、もうすでに手遅れだった。

入院中もこの家に帰りがついていたけれども、戻ってきてこの家の寂しい状態を見せて悲しませるわけにはいかなかった。俺はすでに家を出てマンションに住んでいたし、お袋がいなければ週末に帰ってくることもなかった。親父も病院の近くに泊まり込み、

通えるだけ通って付き添っていた。兄貴も結婚して外に出ているから、業者の手が入っていても誰も生活していかない家は生気を失い、たまに戻っても薄どんよりとしているようだった。

住み手と主婦を失ったこの家を、前のように維持するには誰かの手が必要だと親父が言い出したのは49日も済んだ頃だった。

なんとかサービスってメイド派遣会社から一流のハウスメイドが来ると聞いていたから、どんなおばさんが来るのかと思っていた。想像してたのはハイジに出てくるロツェンマイヤーみたいな女史だった。なぜその名前を知ってるのかというのと、母校にそんなあだ名のオールドミスの教師がいたからだ。

「ハウスメイドサービス・ヴィクトリアから参りました、長岡です」

「どうぞ」

最初にインターフォン越しに聞いた声は落ち着いていて上品で、これはひょっとしていい女かもと期待したのは男の希望だ。遊び相手もセックスの相手も困りはしていないが、家に帰ったときも相手してくれる女性がいればそれに越したことはない。

まあ、若いメイドだったら向こうもまんざらでもないだろうし、こっちもそんな目で見てしまうのはしょうがないだろう。メイドっていうのは、なんでもこっちの言うこと聞いてくれそうだという従順なイメージがあるしな。どっかのオタクが目の色変える喫茶店にいるメイドとさしてかわりはないかもしれない。だがそこは一応名前の通った派遣会社らしく、腕は超一流という触れ込みだった。

だが、現れたのは、あの野良猫だ。

そりゃ、もう10代の子供じゃないから、身体つきだっけすっかり女らしくなってる。まあ、胸の貧相さは相変わらずのようだし、顔立ちも昔の面影を残して童顔だった。どう見ても人妻には見えないんだよな、旧姓名乗ってるし。

聞いた話では、高等部を卒業したあと、一年足らずで子供ができて結婚したはずだった。なのに……なぜだ？

野良の父親の会社、長岡物産は彼女の卒業前から業績不振が続き、社長である父親が病に倒れ、彼女の高等部卒業後すぐに倒産の危機に追い込まれた。ウチと親戚関係にある宮之原財閥の企業の一つに吸収合併されたために、社員はそのまま、元いた社長重役はお払い箱になったが、借金に追い回されることだけは免れたはずだ。

「おまえ、結婚したんじゃないのか？ 卒業してすぐに」

そう聞いたら、にっこり愛想笑いを浮かべて『別れた』『バツイチ』だと答えた。

「けど、子供がいたんじゃないのか？」

そう聞いた途端、アイツの身体がビクンと強張ったのがわかった。そしてゆっくりと顔を歪めて微笑むそれは、見てるこっちが辛くなるような寂しい笑い顔。アイツには絶対に似合わない、なにかを抑え込んだ、悲しい微笑みだった。

そんな顔を以前見た記憶がある。

——俺の母だ。

母は時々そんな目で俺を見ていた。俺が見てるのに気付くと、すぐさま満面の微笑みに変えて俺を抱きしめてくれたけれども、そのことが幼い頃からずっと引っかかっていた。

そして、その原因は自分にあるのではないかと、薄々感付いていた。

だからといって、愛されてなかったわけじゃない。十分な愛情を注いでもらったと思う。

母は主婦としても、妻としても、そして親としても完璧な人だった。家族を愛し、父の建てたこの家を大切に守り、部屋中を飾り、庭に花や野菜を植え、温かい食事を作り、笑顔絶やさなかった。

その母が唯一あの表情を浮かべた瞬間を思い出して、もしかしたら、同じ顔をするコ

イツだったら、この家を守ることができかもしれない。そう思えたから、俺は聞いた。

「おまえはこの家をどう思う？」

そう聞いた途端、彼女の顔がぱあっと明るくなった。昔よく見かけた野良の笑顔だった。「すごく素敵です！ 亡くなった奥様が、丹誠込められてたんだなあって。大事にしてあげなきゃ罰が当たりますよね？」

即答だった。

「そうか。なら、おまえでいい」

俺はコイツを認めたんだ。

この家を頼むと、俺は言った。だが、かしこまって礼をよこすコイツの態度が少しだけ癪に障る。俺は昔どおり『野良』と呼んでいるのに、やたら他人行儀だ。おまけに同級生だったことも忘れろだつて？ そうでなければ俺のことを様付けか『ぼっちゃま』なんて呼び方をすると脅してくる。

「まったく、なんてやつだ？ そんなに俺と同級生だったっていうのが嫌だというのか？ なんにしても、俺がここに住むわけじゃないから、すぐに関係なくなるけどな。」

この家を、もう一度母がいた頃のようにしてくればそれでいいんだ。顔を合わせるのとは今日ぐらいで、後はもう関わることもあまりないだろう。

俺は野良を親父に引き合わせておこうと思っただ。こいつを見れば、親父も安心するに



違う。この家の生気がなくなり、一番気落ちしてるのは親父なのだから。ここに住むのだって、たぶん親父だけだしな。

だから、今から親父の入院する病院に連れて行こうと思いついた。それなのに細々と動き出す野良。

なんなんだ、一体？ 俺は待たされるのが嫌いなんだぞ！

だが、動き回る姿は昔の野良じゃなく、いっぱしのプロらしい無駄のないものだった。棚の中や冷蔵庫をさつとチェックしながらメモを取っている。

へえ、やっぱり台所に女がいるのはいいもんだな。

野良の姿が、エプロンをした母に重なって、『食事の用意ができたわよ』と振り返り呼ばれる幻を見た気がした。

なんか、似てる？

台所に立つ姿、高い戸棚に手を伸ばすときのしぐさ、そんなものまで母と重なって見える。

まさかな……

俺はありえない現象を追いやろうとしていた。母と、どこか似ているという錯覚を。

自分の布団の在処あちかとか、色々聞いてきたが俺はそれに適当に答えてしまった。野良に母を重ねて見ていたことに動揺していたのだ。正面から見るとちっとも似てやしないの

に。

俺はまともに野良の顔が見れないまま、その場を離れ、とりあえず先に病院へ向かうことを選んだ。

### 3

親父の入院する病院に行くと、兄貴夫婦がいた。相変わらず俺を見ると視線をそらす兄嫁。

従姉弟の澄華すみか……俺の初めての女。

俺に初めて女を意識させたのは、俺よりも3つ年上で、どんどん先に成長していく彼女だった。その彼女に追いつきたくて、勉強もしたし、大人ぶっても見せた。

側にいるとき、さりげなく繋いだ手を握り返してくれたり、不意にキスを奪ったときも逃げずに受け入れてくれたはずだった。

はじめて夢精したときに、夢の中で淫らに揺れていたのも彼女だった。

俺にとつて女だった澄華。

——愛していた。

幼いながらも、その思いは留まるところを知らず、澄華もその思いを受け入れてくれたはずだった。

あの夏の日。

家族の目を盗んで俺たちは結ばれた。彼女が18歳、ちょうど俺の16歳の誕生日に、彼女は俺にすべてをくれた。

初めての体験。慣れない俺は導かれ、女の身体つてやつを教えられた。重ね合わせた熱い身体。潜り込んだ彼女の中は、熱くぬかるんで柔らかく俺を締めつけて、俺はさまざまその行為に夢中になった。

快感に腰を振りまくる、まだガキだった俺。澄華をイかせてやるとかそんな余裕もなく、彼女が用意してくれた避妊具だけを身につけて彼女を貫いたのだ。

経験があつた彼女は甘い声を上げ、その白い脚を俺の腰に絡みつかせ、俺が果てるまで追い込んだ。

自慰では得られない快感と、惚れた女を抱く充足感は俺をこの上なく幸せにした。

なのに……ある日突然、彼女は俺と目を合わさなくなった。

そして告げられた別れの言葉……

ただの従姉弟同士ならなんの支障もないのに、なぜ？

その後突然、兄貴と交際、婚約。

どうして俺とじゃだめで、兄貴とだったらいんだ？

すでに社内でも人望厚く優秀な兄貴と結婚すれば、跡継ぎ問題が円満に納まるから？

そんなの許せなかった。

何度も奪ってやろうと思った。だけど、それは彼女から頑なに拒否された。

ヤケになって何人も女を抱いた。冷めた目で抱けば、余裕で女を夢中にさせることができた。覚えたテクニクを使って可愛がつてやれば、自分からおねだりさせるぐらいのことはできるようになった。

だから、セックスで彼女を言いなりにしてやろうと、姑息な手も考えていた。

抱いて、離れられなくしてやろうと、押し倒し、無理矢理犯そうとした。だが、それは思いもよらない言葉で拒否された。

『だめよっ、私たちは異母姉弟かもしれないの！』

最悪の言葉で……

信じられなかった。

そのとき脳裏を掠めた、伯父貴のふてぶてしいほど自信満々の顔。優しい兄貴と親父はよく似ている。

だけど俺はどちらかという伯父貴に似ていた。曾祖父がそんな美丈夫だったと言いつても聞かされていたし、根元が同じだからとあまり気にはとめていなかったが、それだけでも真実のような気がした。

親父と兄貴の間にあつて俺にないもの、それを数え出すとキリがない。それと反対に、成長する毎に伯父貴に似てくる俺の容姿。ふてぶてしい笑い方も、周りの人間にそっくりだと何度も言われた。

この捻くれた性格も、根性の座った強気なところも、全部。今思えば、あの母の悲しい微笑みはその真実を憂いでのことだったのだ。

母は俺を妊娠したのを機に、この家を建てたと言っていた。

澄華から聞かされたその言葉は、あまりにもむごい行為の顛末だった。

当時、まだ広い藤沢の敷地内に同居していた兄弟夫婦。だが元々政略結婚の上に、伯父のあまりに度重なる女遊びや横暴さに耐えかねた名家の妻は、家を出ていってしまったという。

そして、弟が出張で帰らない嵐の夜、酔った兄は弟の妻を無理矢理犯した。

その後、妊娠に気付き、出産間際になつても、どちらの子ともわからぬ苦しみに耐えて、母は俺を産んだのだそうだ。

その後もその事実を誰にも語らなかつた。しかし、澄華と俺の関係に気付いた母は、彼女にその可能性を告げたと言う。

告げられた真実に嘆き悲しんだのは、澄華も同じだったはずだ。

なのになぜか俺を避け、俺を忘れようとして受け入れたのが、俺の兄、藤沢雄弥だった。

大好きだった自分の兄を相手に俺は恋をなくし、愛する女を兄に奪われながら文句も言えず、ただ反抗するしかなかった。

やがて兄貴と彼女は結婚し、子供はいないが仲むつまじい所を見せてくる。

もう忘れなければいけない恋だとわかつていながら、未だに忘れられないのはなぜだ？

そして、病院で、彼女らに野良を恋人のように見せてしまったのはなぜだろう？  
すぐにバレるのに……

俺に不特定多数の女がいることなんて、誰もが知ってることだ。

なのに、なぜ、こんな野良猫を彼女だと思わせたのか、俺にもよくわからなかった。

まだ、心が痛むんだ。

彼女を見るたびに、心が軋む。

欲しいのに、もう手に入れることができない禁断の果実。

いつそ地獄に堕ちてもいいから、想いを果たしてしまいたいと思ってしまう。

異常なほど女の身体を求める理由はわかっている。

誰を抱いても、あの女じゃないから。

俺の身体は飢え乾いているんだ。

どんな女を抱いても満足しない。

だから……

——義姉さん、澄華。

あなたを忘れたいのに、未だに忘れられない。

#### 4

だから、あの女を抱く。

伯父の後妻、富美香。

いいカラダしてるんだ、こいつが。おまけにスキモノときてる。そして野心家だ。

20歳で伯父の愛人になり、娘を産んだ。澄華の下の妹の彩華だ。そして、そのことを盾にとり妻の座に落ち着いた。元は秘書だと言っていたが、仕事してたのかナニしてたのか分からない。その美貌と身体で伯父に取り入った、ある意味優秀な女だ。

16歳で恋の終わりを突きつけられた俺は、散々遊び回りグレかけたりもした。苛立つ気持ちと性衝動は、女をこまして突っ込んでなければ気が済まなかった。澄華じゃなきゃ、いくらヤツても充足感など味わえないのに……

そんな俺の狂気にも似たオスの匂いをかきつけたのか、富美香は自分から誘ってきた。

たいしたもんだったよ。その身体も、性技も。あんなにイカされて、いいようにされたのは初めてだった。

俺は溺れたさ、そして、徐々に逆転していった。

いつの間にかイカされるんじゃないかって、イかせまくる方に。哀願あいがんするのではなく、される方になってた。

今なら、どこでだって俺に股を開くいい排泄口だ。

伯父の家の片隅でも、トイレでも、出先の車の中でも、どこでだって俺のモノをくわえて喜んでやがる。

目的を果たしたから、もう子供を産むのが嫌だと、勝手に避妊リングを入れてるのを伯父貴は知らないんじゃないか？

だから、いつでもどこでも無茶苦茶に抱いてもいいんだ。それをこの女は喜ぶんだからな。

普通じゃない回数や激しさ、モノの大きさと満足するのだそうだと。

いや、言い換えるなら、もう俺か伯父貴じゃないと満足しないんだと。

似すぎて俺と伯父貴のことも、寝てみて確信を持ったなんて言いやがる。強いところも一緒だと。

若くて回数楽しめる分、しょっちゅう俺の方を誘ってくるがな。

今日だってそうだと。

急に伯父貴が帰ってしまった、俺が送ることになったが、食事はもちろんキャンセルだ。他の場所にしたと言えはいい話で、そのままホテルにしけ込んだ。

「ちよどしたかったの」

「嘘言え、一緒に来るってことは、昨晚たっぷり可愛がってもらったんだろ」

「妬いてるの？」

「まさか、兄貴達が来てたんだよ……」

富美香も俺と澄華の関係を知っていた。

「ねえ、溜まってるの？」

「他にも女はいる」

「あの子は……？」

「あの子？」

「連れてきてたでしょ？」

「あれは本当にメイドだよ。今日から家のことをやってくれるらしい。まあ、俺は滅多に帰らないから関係ないがね」

「そう、じゃあ、はやく、して、もう……ほらあ」

開いた女の下肢はトロトロだった。  
ホテルの部屋に入ってすぐに抱えて突き上げる。そのままのスタイルで部屋を闊歩した。

「あんつ、はあああ！ 奥いいのお、苦しくていいつ、ああああん……」

激しくしてやればするほど喜ぶ身体だ。俺は突き上げて乱れさせたあと、ベッドでよがり狂うほど攻め立てた。イツてる最中まで突き上げていたら、最後の方、富美香の意識は戻ってこなくなつた。ホテルじゃないと抱けないほどデカイ声だし、涎も失禁も有りつてヤツだ。

そうして愛撫もなしで、ひたすら腰で攻め続けて2時間。俺の倍以上イキまくつた富美香は、ぼろぼろになってシーツの上でだらしなく伸びていた。

「おい、さつさと用意しないと置いてくぞ」

「……ん……帰るの？」

「約束、忘れてたんだ。さつさとしろ、帰るぞ」

シャワーを浴びて身繕いを済ませた富美香を、急いで藤沢の本家へ送り届けると、俺は自宅へと向かった。

行為の後、煙草に火をつけようとして思い出した。

——野良のことを。

親父と約束していたから、忘れてたじゃすまないだろう。戻って野良に屋敷のことを教えると言っていたし、それにアイツも初めての家でひとりじゃ心細いだろうって、なぜかそう思ったんだ。

## 5

なんで裸なんだ？ 風呂を洗ったというのは聞けばわかるけれども……

富美香を送って帰ってくると、ずぶ濡れの靴が玄関にあった。

ここは交通の便のあまりよくない住宅街だ。どうやって帰ってきたのか知らないが、電車を乗り継ぎ、雨の中、傘も持たずに濡れながらここまで帰ってきたんだと思うと、ちよつと悪い気がした。送っていったのは俺だし、置いてきたのも俺だ。

おまけにコイツが雨に濡れてる間、俺は女としこたまヤッてたってわけだ。

別に気を遣うような相手じゃない。同級生だといっても、うちが雇ったメイドだ。今

さら態度を変えなくてもいいはずだった。

だが、俺が帰ってきてても姿が見えない。出迎えてくれるのを期待していた俺は、少々落胆しながらも、とりあえずシャワーでも浴びようとバスルームへ向かった。その途中でバスタオル一枚の野良と鉢合わせた。

「きゃああああ！」

「ばつ、きゃあじゃないだろ？」

俺は思わず野良の口を押さえて黙らせた。

生娘みたいに脅えるな！ そんな貧弱な身体に欲情すると思うのか？ この俺が。どうやら帰って来て欲しくなかったようで、不機嫌そうな目で俺を見る。

バスタオル姿で凄まれても怖くもなんともないぞ。自分に不利だつてことが、まるでわかってないようだった。相変わらず女としては無防備なヤツだ。貧弱でも一応凹凸があることは数年前に確認済みだから今さら驚きもしないが、至近距離の野良の身体から風呂上がりのせいか、他の女のようにキツイ香料がしてこないことが新鮮だった。大抵の女は風呂上がりでも甘ったるい香水やボディローションつけまくってるからな。

真つ赤な顔で、無防備な姿なのを忘れて逆らってくる彼女をからかってやろうと思っていた。そんな俺に、野良は見事に噛みついてきやがった。

コイツは気がついていたんだ、俺と富美香の關係に。

「気をつけてくださいませね、あんなんじゃすぐバレますよ」

腰に手を回したのを見て気がついたらしい。メイドらしく最後まで見送つてたつて訳だ。だけど知られたところで別に痛くも痒くもない。俺の女性関係が派手なのは周知のことだし、伯父貴もい勝負だ。妻の不貞の一つや二つで、目くじら立てるほど執着してるようにも見えないしな。あちこちに若い女や愛人がいるのだろう。だから出張も急な用事も多いんだ。今日の会社からの急な連絡だつて怪しいもんだ。

だが俺に説教してくるとは、いい根性してるじゃないか？ 言つてることは一応もつともらしいが、本当にわかってるのかどうか……こんな子供みたいな身体で。

まあ、野良なりに世間に揉まれて成長したつてことか？ もうガキじゃないんだし、結婚して子供だつてできるようなことしてるんだからな。

それよりも腹が減った。なにも食べてこなかったのは失敗だったが、帰ってくることを優先したのだからしょうがない。コイツはこれでもメイドなんだから、飯でも作れと命じれば作るだろうと思つていたら……やっぱりコイツは野良だった。

「あら、そちらの食事はされなかつたんですか？ 信じられない！ でも、この時間からですと、たいした物をご用意できませんけどよろしいですか？ ほんとに、こんなに早く帰つてこれれると思つてませんでしたから」

そんな憎まれ口を叩いてくる。生意気な！ そんな口の利き方、どこで覚えたんだ？

だからそんな格好でなにしてたんだと聞き返してやったら、ようやく自分の姿に気付いたらしく、慌てふためきはじめた。

いろいろ言い訳した後、風呂に湯を張って俺に入るかと聞いてきた。一緒に入る気かとからかつてやると、その場から逃げ出そうとしやがる。思わず手を伸ばして俺は野良を捕まえた。

「セ、セクハラですか？」

裸で目の前にいて、そんな言いがかりが通用するののか？

「裸で誘っておいて？」

「さつき済ませたところでしよう？ パスしてください！ もう、旦那様に言いますよ？」

その言葉に思わずムカツとした。

親父に言うだと？

メイドの分際で告げ口か？ 俺は笑い顔を凍らせ、声を低くした。

「……おまえな、そのこと親父に言ってみろ、承知しないぞ？ この家から追い出してやる」

「い、言いませんとも！ そのかわりに、簡単にクビにしないで下さいね？ 手も出さないでくださいよ。でないと、言います！」

なんだクビが怖いのか？ それならと手の力を緩めてやると、とんでもないことを口

にした。

——俺が伯父貴に似てるだつて？

そりやそうさ、親子かもしれないんだからな！ だけど、コイツに指摘されたことが氣にくわなかった。久しぶりに会った元同級生に、その場で居合わせただけの伯父との血縁を見透かされているようで怖くなったんだ。

俺は壁を叩き、脅しながら無理矢理野良の唇を塞いでいた。

その感触に昔を思い出した。

あの当時、男を知らなかったコイツは慌てふためいてパニックに陥おちったんだっけ？ もう男を知って変わってしまったコイツが、どんな反応起こすかが楽しみだった。

柔らかい、まるで子供みたいになにもつけていない唇。

久々で新鮮だった。小さくて、飲み込んでしまえるほど儂い唇は、震えている割に熱かった。舌を滑り込ませても、どこもかしこも熱くって、柔らかくって、甘かった……煙草の香りも、人工的なミンツの香りもしないキスに夢中になり溺れかけたとき、くつと、腕の中の身体が脱力した。力の抜けた野良の身体からバスタオルが落ち、その白い身体を晒さらした後、意識を落とすやがった。

なんだ？ 元人妻だろうが？ キスぐらいで墮ちるか？





「なんで……」

ぶつくさと独り言のうるさい奴だ。

そりゃまあ、俺のベッドにふたりで寝てたわけだし、寒いといって震える彼女を抱きしめて眠ってたわけだから、驚きもするだろう。目が覚めたら真っ先に見たのが俺の胸だろうし。俺はやたら暑かったんで、上半身にはなにも着てなかったからな。

「なんでいるの？」

「なんでだと？ さっさと気を失いやがったくせに。おまけに熱まで出して雇い主に世話かけといて、なんだその態度は！」

状況を説明してやると、辺りを見回し確認すると益々青ざめていく。まあ、メイドとしては酷い失態だわな。雇い主の息子の部屋で一晩あかしたわけだし。

これも作戦の一つと言っちゃなんだが、秘密を知った女を黙らせるには同じ穴に引き込むに限る。だからといってコイツに手を出すつもりはないけれども、こんな事実があれば、後ろめたくて俺と富美香のことを誰にも言わないだろうと考えたのだ。

けど、こいつは自分が熱出してたって自覚ないんだな。まあ、これだけ元気なら安心だが。

それにしても、ほーっとしてるところは意外と可愛らしいもんだ。だけど俺が上半身

裸なのを見たぐらいで赤くなりやがって……処女じゃあるまいし。

一応はバツイチだろ？ 結婚してたのなら、男の裸も、昨日のキスだってもうちょつと慣れてもおかしくないか？

そう、熱があつたから熱かつたけれども、野良はキスに自ら応えていなかった。よほどキスの下手な旦那だったんだろうか。まあ、それはどうでもいい。とりあえず腹が減っていた。昨夜は結局食いつばぐれてそのままだったんだからな。今から急いでも仕事には間に合わない。飯ぐらい食っていても罰は当たらないだろう？ なにせ昨夜の俺は親切だったと思うからな。

けど、よりにもよって『ナニも？』って、俺が手を出したとでも？

俺はそんなに飢えちゃいない。昨日だって、時間は短かったが散々富美香とやってきた後だ。

「見ればわかるだろう！ おまえの身体は綺麗なものだ。俺は病人やメイドに手を出すほど女には困ってない！ それこそ、おまえが邪推するようにたっぷりヤツてきたとこだからな。けどな、そのことを親父に言ったら、俺はおまえに誘惑されたと報告するかな。右の胸の下のほくろや、左太股の内側にあるほくろの在処なんてバラされたくないだろ？」

「い、言いません！ あれ？ でも、なんでそんなの知ってるんですか!？」  
着替えさせるときに、しっかり拝ませてもらったさ。まあ、そそる身体じゃなかったが、なかなか綺麗な肌をしていたな。ほくろの位置の確認は、こうやって替すときに使  
うためだ。

「なら、黙っているんだな。まあ、知ってもらってる方が俺はやりやすいけれどもな」  
そう、女の出入りの激しいマンションも掃除してもらうんだし、富美香との関係は黙  
っていてくれるなら、知られている方がやりやすいし口裏も合わせられるってことだ。  
そのまま黙ったってことは了解ってことだな。

俺がにやりと笑ったのを見た野良は、急いでベッドから降りようとして立ち上がり、  
ふらついたところを俺が抱きとめた。

熱出した後だっというのに無茶をする。

けれども腕の中に感じたのは、昨夜ずっと嗅いでいた野良の匂いだった。

やばっ……！

ただでさえ朝は若い男にとって辛い時間帯なんだ、正直に反応する下半身、嫌がりも  
せず一瞬気を抜いたようにもたれかかってくるものだから堪らなかつた。

「なんだ？ 昨日と違って朝はどこまで我慢できるかわからないぞ？ そんな風に誘う  
な。それとも、長い間放って置いたその身体、慰めてやろうか？」

「誘ってませんし、結構ですっ!」

ちよつとだけその気で手を伸ばすと、やっぱり猫みたいに飛び跳ねて逃げていった。

こいつ、やっぱり野良猫だ。

可愛がってやることもできない。せいぜい、熱出したときに抱え込めるくらいか？  
そう考えると自然に笑えた。

リビングに降りると、野良がかつちりとメイドの制服を着込んでいた。シンプルな、  
まるでホテルの従業員かなにかのようなグレーの制服に、白いエプロンといった極普通  
のメイド服。フリルもなしか？ まあ、そのほうがコイツらしい。

けれどもやっぱり様子はおかしい。

いきなりびくくと跳ねて皿を落としそうになってるし、真っ赤な顔して熱でもぶり返  
したんだろうか？

簡単でいいといったのに、そこらのホテルのモーニング並のメニューを揃えてるのを  
見れば、やはりコイツはメイド、それもそこそこできる方だっというのはその物腰でわ

かる。元はお嬢様で行儀作法やお稽古事も仕込まれてたはずだ。親の事業が傾きはじめるまでは、なに不自由なく育ってきたのだから。

まあ、メイドになるまでの経歴なんて俺の知ったコトじゃない。出された朝食をきれいに平らげて、俺は会社に出る準備をした。

当然のごとく、野良は見送ろうとする。

「行ってくる。今日は早めに帰ってくるから、わからないこととか書きだしておけよな」  
このままマンションに帰ってもよかったけれども、熱を出してふらつき、未だに顔を赤くしてるこいつをそのままにしておけなかった。よく、熱を出した俺にお袋はいろいろと世話を焼いてくれた。さすがの俺も病気のときは、誰かに側にいてもらいたかった。なのになんて顔するんだ？ 嫌そう、じゃないな……辛そうでもない、寂しそうだった。だがすぐに真顔になって、俺を玄関先まで見送るために後からついてくる。

まだ顔色も良くないし、無理はしないように言って俺は家を出た。

もうすでに重役出勤だ。親父の仕事は兄貴が引き継いでるし、俺の仕事は今のところ急ぐものはない。しばらくは家のことで勝手すると連絡もしている。

親父もこっちの家に帰ったときは渋滞の時間を避けて、少し遅れて出社してたしな。それにしても出掛ける前に、買い出しでも手伝ってやろうと思つて、早めに帰つてく

ると告げたときの怪訝けげんそうな野良の顔。そんなに俺が早く帰つてきちゃ悪いのかと思う。この辺りは車がないと不便だから、せっかくこちらから言い出してやったのに。

本当は昨日、病院帰りにでも買い出しに付き合つてやるつもりだったんだ。この辺りの店とかも知らないから不便だろうと思つて。なのにあいつを置いて富美香とやりまくつてもんだから、それをすっかり忘れてたつてわけだ。

あいつも昨夜のことを思い出したらバツが悪かったのだろうけど。

会社に向かう車の中、最後に野良がちらりと見せた寂しそうな表情がずっとちらついていた。

## 7

『おい、政弥。茉悠子さんが今、病院に来てくれてるんだけど』

「はあ？」

親父からの電話だった。

なんで昨日熱出した人間が、うろうろと出掛けてるんだ？ まさか、自分も診察してもらったのか？ それならなぜ、あんな遠い病院までわざわざ行ったんだ？

「まさか、だろ？ あいつ昨日濡れて帰ったみたいで、今朝まで熱出してたんだぞ？」

「なんだと？ おまえは、そんなあの子を放って仕事に行ったのか？」

「違うだろ、それは。」

「いや、今朝は熱も下がってた」

『だが、熱の原因は、昨日彼女をひとりで帰らせたからじゃないのか？』

「仕方ないだろ？ 伯父貴に頼まれたんだから」

『茉悠子さんも一緒に食事して、それから送るって手もあっただろう？ 連れてきておいてひとり帰すんなら、富美香さんの食事に付き合わなくてもよかつたんじゃないのか？』

その通りだ。だが、食事だけじゃなかつたから、なんてそれは言えないので黙っていた。『とにかく、今から迎えにきなさい。彼女は昨日わたしと約束してた紫陽花と、手作りのプディングまで持ってきてくれたんだぞ？ 本当に優しい子だ。美津子の作るプディングと同じ味だったんだ、わたしは嬉しくてね……』

見かけによらず甘いもの好きの親父が感動的に話してるのを、受話器越しに聞きながらため息を落とす。

すっかりお気に入りかよ？ それでもって息子をメイド専用の運転手にでもするつもりか？

病室まで行くと、親父とにこやかに話すあいつがいた。

なんだ、あのはにかんだような微笑みは？ 俺の前では逆毛を立てた猫のごとく刃向

かってるくせに！

「親父、もう連れて帰っていいのか？」

引き離すように、急いでる風を装って連れ出した。だけど俺の顔を見た途端、またいつもの野良の顔に戻っていやがる。

「なんでうろうろ出てきてるんだ！ じっとしてろって言っただろ！」

「え、でも昨日、旦那様と約束したので」

散々俺に迷惑をかけていながら、親父との約束が第一か？ おまけに終業間際といえども、文字通り重役出勤した俺を早退で会社から帰らせておいて！

車の助手席に押し込んで、どこか買物に寄るところはないかと聞いたが、あいつは俺のマンションを教えろと言ってきた。買物はその後でいいらしい。

そりゃ、俺の部屋の掃除も頼むわけだし、いずれ教えなければ困ることだ。できれば

コイツの体調がよいときの方がいいと思ったが、仕方なく一通り部屋を見せて、近くのクリーニング店も教えておく。それからいくつかの決め事。洗濯物を出す場所、触っていいところ、そうでないところ、ベッドルームの掃除とシーツの取り替えも許可した。

部屋の中を野良があちこち動き回っているのは、なんだか変な気がした。普段、この部屋に来る女はベッドルームに連れ込むか、リビングで飲みながらヤルか、あとはバスルーム以外うろろしない。

「おい、もう帰るぞ、無理してまた倒れたら困るだろ」

その違和感に苛立いらだったのは俺の方だった。

誰かが部屋にいる、世話を焼いてくれる。それをセックスだけの相手にされることを嫌っていた俺が、あまりに自然にそれを許することに驚いていたからだ。それに、いくら元気者のあいつでも、その体調を気遣ったのも事実だ。また倒れたり熱を出されては困るからな。

長居はせずに、さっさと車に乗り込み、買い出しに行くことで、その違和感を打ち消そうとしていた。

買い出しは慣れている。

親父が忙しいとき、よくお袋に付き合わされた。大学に入って車の免許を取ってから、しばらくはお袋のお供ばかりだったくらいだ。誰かとデートに行くなんて面倒くさいから、あまり行ったことがない。女は声かけて寝られればいいんだから。そんなものに行けば、向こうも期待するし、誰かに紹介しようなんて言い出すからな。そんなのは御免だった。

「これだと、大型店で買い物した方が早いな」

買い出しのメモを見て、大型ショッピングセンターに向かった。この建設にはうちの会社も携っていたし、なによりお袋にせがまれ何度か来たことがあるので大抵のものが揃うのを知っている。広すぎてよくお袋も迷っていたから、俺も親父も必ず買い物に付き合っていたけどな。

「あの、政弥様の食事のご予定をお聞きしたいのですが。もしかして、今夜もお屋敷で食べられますか？」

「なんだ、いちゃ悪いのか」

遠慮がちに聞かれて、少々むっとしたのは言うまでもない。コイツの中で俺は滅多に帰ってこない、食事の用意を必要としない人として捉えられているのか？俺の思っていることはそのまま顔に出していたらしい。

「いえ、そういう訳では。準備がありますので、これからの買い出しに加えようかと」  
 「今日は、家で食べる」  
 今日、だ。毎日じゃない。家に帰ると女を抱けないからな。

一通り買い物を終えて、かけよってくる野良。嬉しそうにしつぽ振ってるように見えるじゃないか？

「すみません、お待たせしました」  
 「遅いっ！」

まったく可愛い顔できるんだから、もつとそういう顔を見せればいいのにと思う。だけど俺はわざと機嫌の悪そうな顔をして見せる。そうすると、大急ぎで謝ってくるのがおもしろい。だが、あんまり赤い顔だと昨日の今日だから熱でもぶり返したんじゃないかと心配になってしまう。また熱を出させたら、親父に怒られる。

俺は野良が抱えていた荷物を半分以上持ってやった。野良には重すぎるだろうし、ちよつと疲れた顔してるしな。

しかし、この格好つて傍<sup>はた</sup>から見れば、夫婦か恋人同士に見えるかもしれないな。お袋と一緒にいるときは、余程たくさんの荷物じゃないと持つ気にはならなかったが、今日の俺は随分優しくしている。今誰かに見られたら間違いなく誤解されるだろう。

「茉悠子？」

だけど不意に俺の背後から、彼女の名前が呼ばれた。目の前にいた野良は一瞬にして表情を固めて、そちらを凝視したまま立ちすくんでいた。

振り向くと、子供を抱いた若い男性がそこに立っていた。

俺の知らないその男が誰なのかは、すぐにわかった。

## 8

やはり、野良の別れた夫だった。

「よかった、結婚したんだね？」

それも、馬鹿みたいに俺たちの関係を誤解しやがって、ほっとした顔を彼女に見せていた。

思わずむかつ腹が立った。

子供がダメだったと口にしたときのこいつの顔を、今この場でこの男に見せてやりたい。

あのとき、野良は笑顔のつもりだったのだろうけど、本来の屈託のない笑顔を知っていた俺には、その顔が泣いているようにしか見えなかった。

もちろん、別れた理由なんてはつきりとは知らない。だけど、相手の男が抱いている小さな子供と、向こうにいる奥さんらしき女性が連れている子供の年齢を見れば大体わかる。

野良は子供を産めなかった。

向こうの女はふたりも産んでいる。

それが現実だ。

——そして、もうひとつの現実。

野良は結婚したわけじゃない。メイドとして俺のところに来ていただけだ。

幸せは、なにひとつ手にしちやいない。

その現実を相手に告げる気にはならなかった。

「誰なんだ、茉悠子？」

俺は野良の肩を抱き寄せて、笑顔で甘く囁いてやった。

演技しろ、馬鹿っ。

気がつかない鈍感娘に『合わせろ』と合図を送って、俺は夫か恋人の振りをした。

『幸せなんだね』という問いにも、俺は笑顔で応えてやった。

「ええ、俺が幸せにしますから」

今のこいつを、惨めな目に合わせたくなかった。

俺は元氣な野良しか知らない。こんなおとなしい、言葉を全部呑み込んだような、薄く笑う大人の顔をした野良は知らない。

「おい、アレでよかったのか？」

妻と子供の元に戻り、仲良く並んで立ち去る後姿を見送る野良の、作り笑いた顔を俺は見ている。

俺は見ていた。

「うん……ありがと」

早くいつもの調子に戻って欲しかった。なのに、素直に俺に礼なんか言うな、泣きそうな顔して笑うなよ！

「うっぐっ……」



泣くなよ……声を殺して、泣くな！

「無理するな」

崩れ落ちそうな彼女を支えるその腕に、力が入ってしまいそうだった。

なんだ、この気持ちとは？ 抱きしめてやりたいなんて。熱もないの？ また野良が

泣くからか？

「馬鹿……氣遣っちゃって……」

ようやくこいつらしい言葉が出てきたので、少しだけ安心した。抱きしめようとしていたその腕を解いて、くしゃっと野良の頭を撫でてやる。

「車に戻るぞ。ほら、それまで我慢しろ！」

本当に我慢していたんだろう。車に戻ってから、野良の涙はしばらく止まらなかった。

俺は、どうしていいのかわからずに、最近あまり吸わなくなっていた煙草に火をつけた。自分の女なら抱きしめればそれで済む。キスをして涙を忘れさせるほど抱いてやればいい。

だけど、この場合どうすればいいんだ？

仕方なく泣きやむまで待つつもりで、煙草の煙を吐き出した。

「なあ、あれ、元夫だったんだろ？」

なにも知らずに夫の役を買って出たものの、事情を知らないまま、また再会でもしたら、益々彼女を傷つけることになると思いい応聞いてみた。嫌なら答えなくて良いし、俺も知らぬ振りを続ければいいだけだ。

ただのメイドならそんな氣も遣わないが、こいつは野良だ。たまたま我が家に来たメイド、それが野良で、その雇い主は飼い主みたいなものだ。それに、こいつは昔から俺にとって他の女とは少し違った存在だったから……

野良の存在が、どれほど俺の毒氣を抜いてくれたかに氣がついたのは、高等部を卒業してしばらくたってからだった。

俺は大学は外部受験したし、卒業後は男ばかりが集まる所にしか顔を出してなかった。野良の後なんて氣にもしてなかったけど、からかう相手がいなくなったのは、俺にとって寂しいものだった。高校時代、四六時中あの女のことを考えずに済んだのは、野良みたいなオモチャがいてこそだった。

高校卒業後、再び遊びはじめ、富美香と関係を持ったのもその頃だ。

2年後の同窓会のときに、ちらりと聞いた噂が「長岡が結婚して玉の輿、子供もできるらしい」だった。野良の嫁ぎ先の遠縁だというクラスメイトから出てきた噂だったから信憑性があるって、皆が信じたのだ。きつと幸せになったと。

「聞いていいか？ 噂じゃお金持ちの家に嫁いで、玉の輿にのったって聞いてたぞ？  
なのに」

「そうだね、言つといた方がいいのかな？ 19歳で子供ができて結婚して、流産して、  
その1年後に夫の浮気相手の女性に子供ができてるのがわかって、離婚したの」

呆れた……

それは省略しすぎじゃないのか？ だが、それほど言いにくいこいつの過去を、俺は  
なんだって好き好んで聞き出そうとしてるんだ？ 自分でもそっちの感情の方が理解で  
きなかった。

「俺がもしおまえの彼氏だったら、もうちょっと聞きたいと思うぞ？ おまえが苦しん  
だこととか」

そうだ。しっかり者のメイドとしてうちに来たけれども、中身は昔の野良のままで安  
心したのは俺の方だった。

だけど、時々見せるあの寂しげな笑い顔がどうにも似つかわしくなくて、お袋を思い  
出させた。

だから気になっていた。

野良は言った。なにもわからずに結婚してしまったと。聞けばバイト先の仲間だと思  
っていたあの男に、酔った勢いで無理矢理犯られて、子供ができてすぐに結婚したとい  
うのだ。

「おまえな、それって強姦だろ？」

俺はため息と共に苛立ちを隠してそう言い放っていた。

無性に腹が立った。俺は遊びで女を抱くし、酷いやり方をするときもある。だがそれ  
は、そういう趣向のある女に限定するし、これでも避妊は怠らない。『できちゃったの』  
と言われて責任とらされるような遊びはしてないつもりだった。『今日は大丈夫だから』  
なんて言っても聞かないし、最初っからゴムはつける。唯一、避妊しないのはリングを  
入れてる富美香だけだ。

「そうだけど……ごめんで謝ってくれて、責任とるからって、ずっと好きだったって言  
われて。子供ができたってわかったときも、すぐに彼の実家に連れていかれて、結婚す  
るって言ってくれたの。彼のお母さまがすごくいい方で、わたし可愛がつてもらえたん  
だ。だけど……その間に彼は会社の女性と、浮気してた。しょうがないよね？ 結婚し  
ても奥さんとはできなかったんだもの。悪阻も酷かったし、出血も少しあって、お医者  
様にはしない方がいいって言われてたから」

「ふうん、おまえが初めての妊娠や悪阻で苦しんでるその間に他の女抱いてたつてのに、しょうがない？ そんなんでおまえ済ませてよかったのか？」

呆れを通り越していた。

ずっと好きだったら犯してもいいのか？ だったら俺だって、あの後、何度も澄華を犯しているさ。兄貴と結婚して義姉になったとしても、お構いなく身体の関係を強要してる。手錠でも鎖でも、なにを使ってもその身体を拘束して、思う存分蹂躪していい。血の繋がりがあつたとしても、彼女がそれを許してくれたら、何度だってやっていい。だけど、俺はその最後の一線は越えられない。惚れているからこそ、血の繋がりは越えられても無理強いはできない。泣かせたい訳じゃないのだから。それに今じゃ兄貴の妻な訳だし、俺はあの優しい兄貴を裏切るような真似も、彼女の同意なしにはできないと思ってる。彼女が俺を選んでくれたら、そのときは……すべてを捨てようと、ずっとそう思ってきた。

自分でも最低だと思ふ俺よりも最低だぞ？ あの男！ 無理矢理なんでもってのほかだろう？ それも酔って意識なくしてる処女の女に無理強いかよ？ おまけに、あの優しそうな顔で浮気？ 妻の妊娠中、できないから浮気したっていうのはよく聞かぬが、体調の悪い妻を放っておくなんて、俺でもやらないぞ？

親父はちよつともお袋が調子悪いと言つたらべつたりだったし、自分が出張でいな

いときは、必ず息子に付き添わせてたぐらいだからな。もし俺が本当に想う相手と結婚できたなら、彼女にそんな思いはさせたりしない。苦しんだり不安になっていたら抱きしめて、あの夜のように添い寝してやって……って、それは野良だろ！ 違う、俺が思い描く相手は澄華だけだ！！

俺はなにをたとえてるんだ？ 急いで馬鹿な考えを頭から追い出す。

しかし、野良はその後に、妊娠中に浮気現場を見てしまい、そのときに事故に遭い子供を流産したなんて大事なことを付け加えやがった。

野良の顔を見ていられたなかった……

嗚咽を堪えて話すその姿はあまりにも辛そうで、話させたのは俺だけれども、無理に平気そうな顔をするのが余計に痛かった。

だから車をスタートさせた。

帰り道、ゆっくりと車を走らせる。薄暗い夕刻を迎えた街の景色の方が、ざわめく駐車場より気持ち落ち着くだろう。彼女は外の景色を眺めながら、ぼつぼつと口を開いた。なぜその後も離婚せずその家にいたか。

それは簡単だった。野良には行くところなんてなかったんだ。

義母には感謝していたが、見方を変えれば酷い仕打ちでほろほろになった嫁を追い出

して家名に傷をつけるより、抱え込んでおいた方が害もないって所だろう。まあ、野良は逆恨みして仕返しするようなことができるヤツじゃないけれども。結局、浮気相手に子供ができたと告げられるまでその家にいたらしい。

「わたしもね、もっと早くに出ていくべきだったんだけど、行くところなかったのよ、どこにも……だから、わたし……」

せつかく泣きやんでいたのに、また声を詰まらせる彼女の声に俺の方が辛くなった。

俺も、この家をいつ追い出されるか不安だった。

親父の子じゃないとわかれば、どんな対応されるかが怖かった。だけど、どんなに素行が悪くても、親父や兄貴は俺のことを信じてくれた。そのことは感謝してもし尽くせない。母も、一番辛かっただろうに、俺への愛情を目減りさせることもなかった。俺は、この家に帰ることのできる自分が幸せだと思っていた。

だが、野良にはなにもなかった。

実家も家族も、もうなにも残っていない。唯一手に入れた嫁ぎ先にもいられなくなってしまったのだ。

迷子の野良猫。コイツの面倒を見るのは俺でいい。

そう思ったとき、俺は彼女にこう伝えていた。

「今は、あるだろう？ 野良は……うちに必要なんだから」

その言葉を聞いた途端、わんわんと泣き出した野良に困り果てたが、運転中どうすることもできず、シフトレバーを握っていたその手で、彼女の頭を何度も撫でてやるしかなかった。

家にたどり着くまで、ずっと……

## 9

家に着く頃には、野良もかなり落ち着いたようだった。

買い出した大量の荷物を運び込むのを俺も手伝ったが、野良は泣き腫らした顔で、足元もおぼつかないまま、必死でその荷物を片付けていた。

けどな、帰ってくれば即メイドモードな態度に受け応えか？

「今日は、ご迷惑をおかけしてすみませんでした」

帰ってきて、玄関先で真っ先にそう言いながら頭を下げられた。

なんだよ、泣いてたときはそれなりに可愛かったのに。細い肩揺らして、男の気を引くための涙じゃなくて、堪えて我慢してそれでも漏れてくる嗚咽。助手席から聞こえて

くるそれを耳にするだけで、なにもできない自分もどかしかった。

女が泣くのは面倒で嫌だったはずなのに、その涙の原因があまりにも衝撃的すぎた。昔の野良からも、今の野良からも想像できない内容だったから。

さすがの俺も少しぐらい優しくしてやろうかなんて考えていたのに、早速のあの態度だ。

おもしろくない。

目を赤く腫らしたままなにか食事を作ると言われても、頼むとは言えなかった。作らせたとしても、泣きながらやってくるんじゃないかと気になるし、まさか台所まで追いかけて確認するわけにもいかない。

だが、確かに腹は減っている。

俺はメイド服に着替えるために部屋へ戻ると言う野良に、スーツかワンピースを着てこいと命じた。もちろん外へ食事に行くためにだ。

まあ、元はお嬢様だ。どこの店に連れて行っても、テーブルマナーとかは困りはしないだろう。

泣き疲れて元気がないから、せめて身体に優しい食材を使った、フレンチの店にでも連れて行ってやろうと思った。美味しいものを食べれば少しは元気が出るだろう。

いつも美味そうになにかを食べていたこいつの、学生時代の無邪気な笑顔を俺は思い

浮かべていたんだ。

ここから少し車で行ったところに、親父の知り合いのシェフがやってる、家庭的なフレンチの店がある。よく家族揃って出掛けたところだ。そこに野良を連れて行ってやろうと思っていた。普段、女を連れて行けばオーナーシェフの真鍋まなべさんや奥おくさんが煩うるさいし、すぐに誰と行ったかなんて家族中に筒抜けになってしまうから、もっぱら家族専用きょうぞくせんようの店だった。もちろん母が入院してからしばらく顔を出してないが、野良なら連れて行っても差し障りもないと思えた。

それでも野良はメイドが外食に付き合うのを気にしているようだったから、ひとつのルールを作った。

「制服を着てないときは、おまえは野良でいいから」

不安そうにしているこいつにそう告げると、少しだけ安心したような顔を見せた。

それでいいんだ。俺は野良と昔のように、からかったり言い合ったりしたいだけなんだ。あれはいいストレス解消になるからな。それに、たまに笑ってくれればよかった。あの頃のように……

食事の間中、学生時代の話に花が咲いた。『あの頃は』なんて他愛もない話が思ったより食を進めたのか、野良も皿の上の料理をべろりと平らげていたし、食前酒とワイン

で上機嫌だった。もつとも甘口のお子様用のデザートワインを特別セレクトしたんだけどな。

俺も車の代行運転を頼んだから、安心してワインを楽しんだが、意外に酔いが回ってるのに驚いた。

あんな現場に居合わせて、俺も多少ショックだったってわけだ。子供っぽいと思っていた野良が、本当に結婚していたという事実を目の前に付きつけられて、おまけに離婚のあの理由は酷すぎる。

なんて言っただけいいのか分からないほどだから、いっそのことこんなときは泣きはらすより美味しいもの食って、酒でも飲んで思いつきり暴れるといいんだ。少しはスッキリするはずだから。

けどな、ほんの少しのワインでここまで酔うか？

「おいこら、起きろ！ 車から降りないと帰れないだろうが？」

そう言っただけ代行運転の後部座席で動かない野良を揺ると、なんとか自力で這い出てるが、立ち上がろうにも脚に力が入らないようで、素っ頓狂たくまきょうな声を上げてすとんと座り込む。

「ったく、今日だけだぞ」

俺は野良の身体を抱き上げた。すると寝ぼけているのかその腕を俺の首に回し、すりすり頬ずりをはじめてくる。

マジで野良猫飼ってる気分だった。

代行運転業者が気を遣ってくれて、玄関の鍵を開けてくれたのでそのまま鍵を受け取って中に入る。

「あのさ……わたし、今日わかったんだ」

不意に俺の耳元で、眠そうな声で野良が言った。

「なにが？」

「赤ちゃん……産みたかったんだって……」

きつと、それがこいつの本心だったんだらう。

目の前に見せつけられた現実に傷ついて、それでも自分の中で答えを出したんだ。

「いつか産めばいいだろ」

だけどその言葉に彼女は『無理』だと答えた。『怖い』のだと。

自分の中の命を失うことは、こんなにもこいつを弱気にするものなのか？

それだけじゃない。普通の恋愛を一度も楽しまず、ただ一方的に与えられる苦痛だけ

のセックスを経験し、それがすべてだと思ってしまうている。たった一度のセックスと間違った結婚で、あんなに明るくて元気だった彼女を、臆病な、傷を抱えて怯えた迷い野良猫に変えてしまったんだ。

俺だって、今は誰とも結婚する気はない。

16歳のあの日、俺は恋も希望もなにもかもなくした。未だに忘れられない女の影を抱いたまま、誰かと形だけの結婚をしたとしても、たとえ子供ができて愛し続けていく自信がない。いつまでも彼女を心のどこかで追い続けられないだろう。そんな結婚生活は、妻になった女や生まれてきた子供を苦しめるだけだ。俺にとって欲しい女は澄華だけだから、他の誰もいらぬ。

それでも、俺にとつてセックスは救いでも逃げでもあった。

少なくとも最初の経験は心も身体も伴ったものだった。その恋の希望も未来もすべて真っ黒に塗りつぶされた後は、ただ快樂だけを求めるだけのセックスをしてきた。たとえ一時の快樂でも、多少なりとも自分を慰めてくれていたし、肌の温もりは自分に居場所を作ってくれた。なにより女が自分を求めてくるのが心地よかった。

だから……

「セックスは子供を作るためだけにする行為じゃないぞ」

それを野良に教えてやりたくなかった。俺の下で喘ぐ女達は、一時でも快樂に溺れ幸せそうだったし、寂しさを埋め合えるのも事実だ。

野良はそれを知らない。

「そりゃ、男の人はそうかもしれないけど」

「女だって気持ちいいんだぞ。おまえが知らないだけだ」

「うそ、あんなの痛いだけじゃない」

「いつかわかるさ、おまえにも」

今すぐ教え込んでやりたい気もするけど、傷ついた彼女にそれは酷だろうと歯止めをかける。

「そんな機会、きつとないわよ……一生、ない」

「——そのときは、俺が教えてやる。ついでに産ませてやるよ、俺の子供」

「え……？」

その申し出に野良はびっくりして酔いが一気に醒めたらしく、目をひん剥むいていた。

なんでそんなことを自分が言い出したのかよくわからなかった。俺も一生結婚する気はないけれども、俺の子供……いや野良の子供なら見てみたいと思っただ。きつと可愛いだろうな、野良猫の赤ん坊は。野良はいい母親になれるはずだ。なのにもつたいないだろう？ このままメイドとして、他人の人生の傍観者になるなんて。

「俺も、もう二度と誰かを本気で好きになるなんて一生ないからな。そんな男の子供でよけりや産ませてやるぞ？」

まだ野良が固まったままなので、からかいながらリビングのソファにどさっと落とすとギャーギャーと喚きやがる。

「たたく、野良猫だからしかたないか？」

「も、もうちよつとゆつくり降ろしてよ！」

「は？　ここまで運んでこさせて礼もなしか？」

見下ろすと、びくつと姿勢を正して礼を言ってくる。メイドと雇い人という明確な立場を誇示すると、こいつはしおらしくなる。

俺としてはおもしろくない。野良猫のままの彼女の方がいいに決まってる。マジで本気にしてる野良をからかってやるのも楽しそうに思えた。

「なんなら今から教えてやろうか？」

セックスのことを。

そう言うとき赤な顔して断ってきた。俺は笑いながら台所へ行き、ミネラルウォーターをコップに注ぎ、残りをボトルのまま飲み干した。それと彼女の赤い顔を冷やすために、タオルを濡らして持って行ってやった。

それらを手渡した後も、なんだか部屋に戻るのをもつたいなくて、この穏やかな空気

の流れるリビングにもう少しいたかったから、俺はソファの足下に座り込み、笑いを堪えていた。

「澄華様？」

急に野良がその名を口にした。なぜその名前を？

俺は一気に血の気が引いていくような気がした。

「いや、あの……政弥様が中等部のころ好きだった人って、そうだったなって、今思い出して」

一体、どこでそんなことを思い出したんだ？

そりゃ直接の付き合いはなくても、長い間同じ学園に通っていたから、俺と澄華が学園内で逢って話してたところを見られてもおかしくはない。

血の繋がりがあるかもしれないという理由で別れた。その事実を知られたくないからこそ、誰にも言えなくなった彼女への気持ち。

それを見透かされたような気がした。

「そんな昔のこと忘れろ！　今すぐになっ！　でなければ忘れさせてやる、無理矢理にでも、二度と口にできないようになっ！」

俺は野良の手首を掴んで、そのままソファに押しつけて彼女の身体に乗りかかった。



不意に出された名前に逆上し、俺は完全に理性を飛ばしていた。その名前は禁句で、誰にも知られてはいけない女の名前だった。

どうやって黙らせよう？ 自分の下でもがく野良猫、その非力さに自分の力の優位さを自覚する。そして己の中のオスの欲望が、征服欲に駆られた獣が生まれる。それは狩猟本能をむき出しにして、目の前の脅えた獲物を捕獲してむしゃぶりつきたくなる欲求を抱え込んだ愚かな獣だった。

「んんっ」

思わず唇を塞いでいた。深く入り込み、舌を絡ませても反応できないようだった。

そうか、慣れてないんだ？

そう思うと余計に無茶苦茶にしてやりたくなった。なにも知らないこの身体を開いて、泣きながら喘ぐ彼女を想像するだけで昂奮した。

感じればいい。

その身体が思うままに、俺にすべてを委ねて、自分の身体を知ればいいんだ。快楽に溺れて俺と同じ所まで堕ちてくればいい。

そうすれば……

澄華のかわりにこいつを側に置いて、抱いていれば彼女を忘れられるだろうか？

澄華の身体、彼女の心が欲しかった。だけど手に入らない。そう思うと余計に欲しく

て、餓えて、代償行為を繰り返し返して、余計に渴いてしまった。

それがなぜか、いつもこいつといると癒されている気がしていた。

昔も今も同じ、野良の持つ雰囲気は俺を素直にさせる。安らぐような気さえしてくる。それは昔からで、なぜかはわからなかったけれども、この家に彼女が来て、ようやくわかった。

——母に似ていたのだ。

見かけやそんなものじゃない。雰囲気、立ち居振舞い、そして本質。

あの頃の澄華は俺の母を慕って良くこの家に遊びに来て、ふたり並んで料理をしていた。彼女は母と同じように微笑み、動き回っていた。今の野良のように台所に立ち、料理を作り、母をトレースするかのように共に微笑む澄華。もうあの頃のように笑顔を見られることはなくなってしまうけれども。

俺は、澄華の中に母を見ていたのか？ そして野良の中にも？

まさか、それほどマザコンのつもりはない。

だが、野良を自分のモノにすれば、俺は再びあの幸せを手にできるのだろうか？ もう二度と、あの飢えたような寂しさに襲われずに済むのだろうか？

他の女達のように、澄華のかわりに抱いて、求めさせれば……

——だめだ、野良は違う。

他の女達と同じように扱ってはだめなんだ。  
 彼女は傷ついている、特に男女のことでは立ち直れないほど。それは今日、元夫と対面したときに垣間見たではないか？  
 そう思っているのに、なのにキスが止まらなかった。

## 10

昨日の今日なのに、朝からメイド服を着込んだ野良がいた。

忙しげに厨房でばたばたとせわしなく食事の準備に取りかかっているその動きに無駄はなく、楽しんでる様に見えるところまでお袋によく似ている。普段の逆らってばかりの野良や、昔の彼女からは想像もできない。

コイツはこのメイド服を着ている限りはプロなんだな、と実感する。

昨夜は怖がる野良につき放され、ようやく自分をとめることができた。あの女を<sup>ひと</sup>忘れられない苦しみを初めて口にして、俺はようやく落ち着いた。

それとも、野良を腕に抱いていたからか？ 意外とすっきりした気分で目覚められた

が、顔を合わすと少し照れくさい気がした。

野良も、昨日の涙も俺が手を出しかけたことも忘れたかのように動き回る。まるで母親がいた頃と変わらない朝の風景。家の中は明るく活気に満ちあふれ、料理の湯気や匂いが俺を安心させてくれる。

そうだ、この匂いがなかったからなんだ。誰も帰ってこないこの家には料理をする者もおらず、買って帰ってもその場でしか香りは立たない。だからいくら綺麗に掃除されていても、違和感が大きかった。

お袋が亡くなってしばらく、家の中がどんどん荒れていき、親父も酒の量が増えて、とうとう倒れるほどだった。

俺はずっと、お袋があんなに早く逝ってしまったのは自分のせいだと思っていた。

幼い頃から時々見かけていた、辛そうに歪められたお袋の俺をじっと見つめる顔。きっと、罪の子を目にする度に、優しい母は悩み苦しんだのだろうと思う。澄華と別れさせられてから、その理由がようやくわかったんだ。

まさかと思っていた疑惑に、見事に合致した事実。

母は父を愛するがゆえに、その秘密を抱いて逝ったのだ。澄華と俺のことがなかったら、一生誰にも伝えるつもりもなかったのだろう。伝えてから、なおさら母は辛そうだ